

## 神学博士荒井猷君の「原始キリスト教とグノーシス主義」

### に対する授賞審査要旨

本書の著者荒井猷君は、戦後発見されたナグ・ハマディ文書(Nag Hammadi Texts)の宗教史的意義に深く関心を抱き、ドイツ留学中、古代エプト語を修めてその研究に専念し、“Die Christologie des Evangelium Veritatis”の論文により学位を得(一九六二)、後Leidenにて出版(一九六四)、爾後国際的に講述、論文等により学界に貢献している。本書は、日本にて発表されたグノーシス主義関係の論文の集成であって、ヘレニズム期における同主義の成立と発達とを概説し、特にナグ・ハマディ文書の資料的意義を論究した全く独創的な研究である。

本書の内容は二部に分たれる。第一部は序論をなし、原始キリスト教の成立過程を著者独自の観点において論述する。これに付して四、五の問題を選んでその特性を論究しているが、到る所新資料を駆使し、在来の教會的史料に基づく通説を修正し、この時代の新しい宗教史的思想史的展望を与えている。第二部はこれを背景としたグノーシス主義の研究であり、三章に分けて解説する。第一章は概論で、まずグノーシス主義を異端とする古代教父の教會的立場を論じ、一般にその起源とされている魔術師シモンの伝説に徹底的批判を加え、更にグノーシス諸派について新資料により解釈を試みている。これに次ぎ本論第二章のナグ・ハマディ文書の解説及び研究に移る。

ナグ・ハマディ文書は一九四六年に発見され、五六年初めて一部が公刊されたが、今日までに十三Codices 五十余

篇の中約三分の一が公けにされている。しかしその中に重要なものを含んでいるので、荒井君はその原本（エプト語の Sahidic または Achmimic 地方語）について、誤を正し欠字を補い原意を明らかにして近代語に訳し、更に神話的記述中に思想的内容を推定し、殊に聖書、外典、教父等の文献と照合してキリスト教との関連を探究し、学界先輩の諸説を検討して独自の解釈を与えた。その際特に問題とされたのは創造神と救済者（フォーステール）の信仰、二元的世界観、人間像と認識論的救済説、真理またはソフィアの顕現、死と復活の教え等であるが、就中、救済信仰はグノーシス主義の中心思想をなし、そこにキリスト教と融合する接点が見出される。著者はこの点を重視し、学位論文においても特に「真理の福音」のキリスト論をテーマとしたが、本書でもその結論の一端を再録している（第二章 9）。また同じ原理から「トマス福音書」も重要であり、殊に他の「イエス少年時代記」が古来教父の指摘したトマス福音書と認められていたのを訂正し、更にこの福音書が前世紀末に発見されたオクシリュンコス・パピルス中の「Logia」（イエス語録）と近似する所多く、かつ正典との関係も考えられるとの点から、グノーシス主義イエス像の一類型が抽象されるとして、本書では第二章 5—7 に詳論している。「ピリポ福音書」からも、その文学的性格を論じた後に正典との比較によってそのイエス像を明らかにし、グノーシス主義の特徴を描いている（第二章 8）。

荒井君の研究はこれら文書の文献学的考証に留まらない。同君はこれら文書の教説における差異、特徴の微細な區別を歴史的発展の段階を示すものと考え、同時にこれをグノーシス主義のキリスト教への接触の程度に帰して、三段階を区別する。A 非キリスト教的文書、B キリスト教化しつつもグノーシス的性格を有する文書、C キリスト教化した文書、この三段階の外に例外として D ヘルメス文書を認める。第二章は、この観点による分類表をまず提示して解

説を加え(第二章1)、2以下に発展の順序に従って各グループの代表的文書を選び、その教説を説明しつつグノーシス主義の発展過程を辿るといふ構成を形作り、最後に第三章に、全体に亘る問題を提起して結論としている。その仮説には少しく外的に傾いた恐れがなくはないにしても、論述は極めて実証的であり、文献学的にも精密確実にして説得的である。

要するに荒井君の業績は、ナグ・ハマディ文書の言語学的・宗教史的研究としてわが国最初の唯一独特の位置を占め、たといこの文書の刊行が未完であるために、決定的な結論は不可能な現状にあるとしても、可能な限りにおいて、従来思想的に明確でなかったグノーシス主義の実態を明らかにしその歴史的立場づけを与えたことは、学界への多大の貢献である。同君自ら「これからの研究のための素材に過ぎない」と言っているが、少なくとも将来の研究の方向を示しその基礎たるに足る有力な素材であるといふべきであらう。